

小児科だより vol.74

～ さめはだ ～

2022.11.1 発行

こんにちは。だんだんと冬の気配を感じるようになってまいりました。例年、冬季に流行するインフルエンザですが、当科では、今年も10月中旬より予防接種を開始しております。国内では、過去2シーズン（2020/21、2021/22）インフルエンザが流行しなかったため、現在3歳未満の乳幼児のほとんどは免疫がないと考えられており、また、過去のインフルエンザの年代別入院患者数をみると、特にこの年代の割合がほかのこどもの年代よりも高いことから、静岡県では、この年齢の乳幼児に対するインフルエンザワクチン接種に関して、今シーズンは助成する制度を設けました。詳細は、静岡県のホームページをご参照下さい。



また、2016年の11月号（小児科だより vol.3）に、『うちの子はインフルエンザのワクチンうったほうが良いですか？』というテーマで書いておりますので、乳幼児にワクチン接種する際の参考にさせていただきますと幸いです。

さて、今月の小児科だよりは、いわゆる『さめはだ』として気になって受診されるかたもいる、『毛孔性角化症』についてお話ししたいと思います。

毛孔性角化症は、毛穴（毛孔）に一致した部位に丘疹を生じる疾患で、学童期から青年期にかけて、とくに手足や背中によくみられます。遺伝傾向があり、家族内発症をみることもありますが、成因に関しては全く不明です。軽度の場合は、乾燥肌をもつ児童にかなりの頻度で認めるありふれた皮膚症状で、皮膚の乾燥を防ぐことで予防することが出来ます。

アトピー性皮膚炎のように炎症が主体疾患ではないので、ステロイド軟膏など是不応で、角質軟化作用をもつ尿素含有の外用薬、サリチル酸ワセリン、ビタミンA含有軟膏などの外用療法で対応します。あくまで対症療法のため、外用を中止すると病勢が戻ります。

海外ではレーザー治療を検討した論文も散見されますが、現時点では、費用や効果の面で外用療法より優れているとは言えません。全く無治療であっても、整容的なこと以外にはとくに問題のない疾患であり、かつ加齢とともに改善していきます。

思春期に症状が目立つようになるため、上腕や下肢を露出することが増える夏の間のみ外用療法を行うなどが妥当と考えられますが、気になる方は一度ご相談ください。